琉球大学学術リポジトリ

第5章教員調査から見たプロフエツサー・オフ・ザ・イヤーの評価

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西本, 裕輝, Nishimoto, Hiroki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41693

第５章
教員調査から見たプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの評価

西本裕輝（大学教育センター）

表５－２）プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー教員表彰制度について毎年、新聞やテレビで報道されていることについて知っている

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	114	29.1	29.6	29.6
	ある程度あてはまる	104	26.5	27.0	56.6
	あまりあてはまらない	77	19.6	20.0	76.6
	まったくあてはまらない	90	23.0	23.4	100.0
	合計	385	98.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	1.8		
合計		392	100.0		

調査では、平成16年度より本学で実施しているプロフェッサー・オブ・ザ・イヤー教員表彰制度について、その評価等を尋ねている。ここでは、その分析結果についてふれ、本制度の評価について検討する。

（１）取組の周知度

まず、本取組の周知度についてである。本取組が始まって３年が経過した段階で、全学の教員が、どの程度周知しているのであろうか。

表５－１）プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー教員表彰制度について知っている

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	181	46.2	47.0	47.0
	ある程度あてはまる	126	32.1	32.7	79.7
	あまりあてはまらない	29	7.4	7.5	87.3
	まったくあてはまらない	49	12.5	12.7	100.0
	合計	385	98.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	1.8		
合計		392	100.0		

上の表は、表彰制度そのものについての周知度について尋ねた項目の集計結果である。累積パーセントに注目すると、79.7％の教員が「とてもあてはまる」もしくは「ある程度あてはまる」と回答している。

つまり約８割の教員が本取組について周知しているという結果である。

次に、本取組はマスコミ各社によっても注目され、報道されている。そのことについて尋ねた結果について集計したのが次の表である。

表5－2)プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー教員表彰制度について毎年、新聞やテレビで報道されていることについて知っている

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	114	29.1	29.6	29.6
	ある程度あてはまる	104	26.5	27.0	56.6
	あまりあてはまらない	77	19.6	20.0	76.6
	まったくあてはまらない	90	23.0	23.4	100.0
	合計	385	98.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	1.8		
合計		392	100.0		

表から、「あてはまる」率を見るため累積パーセントに注目すると、約６割の教員が「知っている」と回答していることになる。

表5－3)プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー受賞者による公開研究授業が実施されていることについて知っている

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	111	28.3	28.8	28.8
	ある程度あてはまる	103	26.3	26.8	55.6
	あまりあてはまらない	78	19.9	20.3	75.8
	まったくあてはまらない	93	23.7	24.2	100.0
	合計	385	98.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	1.8		
合計		392	100.0		

受賞者は公開研究授業を積極的に行うことになっている。大学教育センターが主催して実施されているが、その取組も約６割（55.6％）の教員が「知っている」と回答していることになる。

以上のことから、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーという取組について、徐々に周知されてきていると言うことができるだろう。

（２）取組の効果

次の本取組の効果について検討したい。

次の表は本取組を継続させるべきか否かについて尋ねた結果を集計したものである。

表5－4)プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー教員表彰制度は続けた方がよいと思う

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	104	26.5	27.4	27.4
	ある程度あてはまる	134	34.2	35.4	62.8
	あまりあてはまらない	75	19.1	19.8	82.6
	まったくあてはまらない	66	16.8	17.4	100.0
	合計	379	96.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	3.3		
合計		392	100.0		

結果から、６割以上の教員が継続を望んでいることがわかる。

表５－５)プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー教員表彰制度は全学の教育技術向上に役立つと思う

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	60	15.3	15.7	15.7
	ある程度あてはまる	145	37.0	38.1	53.8
	あまりあてはまらない	112	28.6	29.4	83.2
	まったくあてはまらない	64	16.3	16.8	100.0
	合計	381	97.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	11	2.8		
合計		392	100.0		

また本取組が狙っている全学的な教育技術の向上についてであるが、ここでも過半数の教員（53.8％）が「あてはまる」と回答している。

表５－６)こうした教員表彰制度には、学生からの評価が重要であると思う

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	96	24.5	25.3	25.3
	ある程度あてはまる	157	40.1	41.4	66.8
	あまりあてはまらない	81	20.7	21.4	88.1
	まったくあてはまらない	45	11.5	11.9	100.0
	合計	379	96.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	3.3		
合計		392	100.0		

本取組は学生からの評価に基づいているという特徴を持っているが、それについて尋ねたのが表５－６である。７割近くの教員が「学生からの評価が重要である」と回答していることがわかる。

その一方、ピア・レビューによってこうした取組を推進している大学も多いが、学生による評価に加えてそうした評価を取り入れた方がよいかどうかについては、慎重なようである。表５－７から、そうしたことを望む教員は過半数に満たなかった。

表５－７)今後こうした教員表彰制度に、学生からの評価以外に、同僚からの評価、学部長や学科長による評価等、ピア・レビューも取り入れた方がよいと思う

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	57	14.5	15.2	15.2
	ある程度あてはまる	125	31.9	33.2	48.4
	あまりあてはまらない	120	30.6	31.9	80.3
	まったくあてはまらない	74	18.9	19.7	100.0
	合計	376	95.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	16	4.1		
合計		392	100.0		

本取組を含め、授業評価によって授業が改善されたかどうかについて尋ねた結果を集計したものが次の表である。

表5－8)授業評価により自分の授業は改善されたと思う

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	48	12.2	13.3	13.3
	ある程度あてはまる	208	53.1	57.6	70.9
	あまりあてはまらない	82	20.9	22.7	93.6
	まったくあてはまらない	23	5.9	6.4	100.0
	合計	361	92.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	31	7.9		
合計		392	100.0		

約７割の教員が「改善された」と回答している。

表5－9)授業評価結果から見ると自分の授業は学生から高く評価されていると思う

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもあてはまる	44	11.2	12.5	12.5
	ある程度あてはまる	212	54.1	60.2	72.7
	あまりあてはまらない	84	21.4	23.9	96.6
	まったくあてはまらない	12	3.1	3.4	100.0
	合計	352	89.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	40	10.2		
合計		392	100.0		

その結果と言えるであろうが、表５－９から授業が学生から高く評価されていると認識している教員も７割を超えていることがわかる。

学生からの評価の目により授業改善が見られ、結果として高い評価を得ているということができるだろう。

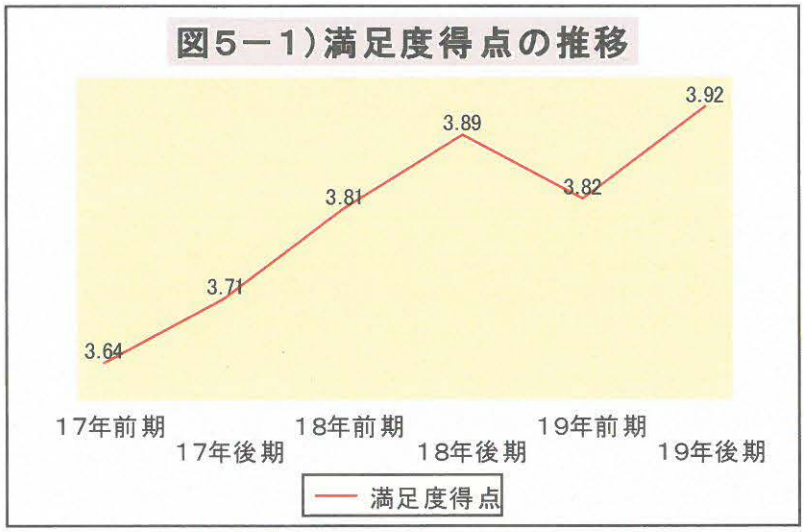
以上のことから、本取組の効果は徐々にあらわれており、授業改善に繋がっていると言うことができる。

（３）満足度の推移

さらに本取組の効果を確認するため、授業評価における学生の満足度得点の推移を、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーが本格的に導入された後の 17 年度から見てみたい。

図５から明らかなように、満足度得点は徐々に上昇していることがわかる。これは５点満点なので、17 年当初の 3.64 というのもそれほど低い得点ではない。それが 19 年度後期には 3.92 まで上昇している。これは他大学の授業評価得点と比べるとかなり高いものである。

このように、学生の満足度が上昇している要因としては、本取組が始まり刺激となり、教員の教育へのモチベーションが上昇したこと、公開研究授業や公開シンポジウムにより受賞者の優れた教育技術が共有されたこと等が考えられる。



本取組を継続することにより、本学の教育のさらなる充実が期待できる。